鳥取県美術館フォーラム２０１６　米子会場

日　時　　平成２８年６月１８日（土）
　　午後１時～午後３時
場　所　　米子コンベンションセンター

○司会
皆さん、こんにちは。本日は鳥取県美術館フォーラム２０１６「みんなでかんがえる美術館の可能性」に御来場いただきまして、ありがとうございます。
私は、本日の司会を務めさせていただきます鳥取県立博物館美術振興課の林野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）
初めに、本日の予定をお知らせいたします。
主催者の挨拶の後、美術館整備に係るこれまでの検討状況を御説明いたします。続いて、和歌山県立近代美術館館長の熊田司様より基調講演をいただきます。その後、パネルディスカッション、会場の皆さんとの質疑応答を行って、午後３時をもちまして閉会の予定としております。
また、配布資料の中にアンケートがございまして、今後の参考にさせていただきたいと考えております。ぜひ御記入をお願いしたいと思います。御記入いただきましたアンケート用紙は、本フォーラム終了後に会場出口の受付に回収箱を設置しておりますので、御利用いただきますようお願いいたします。
なお、本フォーラム終了後には、「意見・質問受付コーナー」と題しまして、皆様と県立博物館学芸員との意見交換をロビーにて予定しております。御希望の方は奮って御参加ください。
また、本日の手話通訳を公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会様にお願いしております。どうぞよろしくお願いします。（拍手）
それでは開会に当たり、初めに主催者を代表しまして、鳥取県立博物館館長の大場尚志より御挨拶申し上げます。

○大場館長
皆さん、こんにちは。鳥取県立博物館の館長をしております大場と申します。
本日は、美術館について考えていただきたいということでフォーラムを開催いたしましたところ、いろいろとお忙しい事情のあった方もいらっしゃると思いますけれども、御参集いただき、本当にありがとうございました。
県立博物館でございますけれども、現在、自然、歴史、美術の３部門の展示等を行う総合博物館といたしまして昭和４７年に開館したわけでございますけれども、その後４０年以上経過いたしまして、建物の老朽化、施設の狭隘化が深刻な状況となってきております。ということで、以前にも美術館の建設計画というのがあったわけでございますけれども、知事がかわったりしたときにいろいろと事情がありまして、県民の皆さんの支持が十分でないということで凍結になっておるという経緯がございます。そうしたことで、県立博物館につきましては、その施設、ハードの部分につきましては、ほとんど手がつかずに今日まで至っておりまして、その深刻な状況というのがいよいよにっちもさっちもいかなくなっております。ただ、そういう施設ではございますけれども、建物としては非常にいい建物でして、県下でほかに１つしかない全国建設業団体連合会の表彰を受けたような施設でございますし、改修すればまだまだ使えるしっかりした建物でございます。ただ、現在建っております場所は、国指定史跡の鳥取城の跡地ということでございまして、増改築はまかりならないという場所でございます。文化庁の許可がおりないという場所でございます。
そういう事情でありますので、現施設はある程度使いたいと、存続させていきたいということもあります。しかし、その老朽化、狭隘化への課題には対応しなければいけないという

状況でございますので、３部門のうち自然・歴史部門のための施設として、現在の施設は存続させようと。美術部門は独立させて新たに美術館を整備しようということで、現在いろいろと検討しておるというところでございます。

この検討に当たりましては、まず、どのような美術館をつくるのか。基本的な方向性について県民の皆さんに十分に理解していただいて、支持していただけるということになったら、そういう県民の皆さんのコンセンサスを得た上で進めていきたいということで、基本的な方向性を取りまとめた構想というものを作成して、皆さんに本当に進めてもいいものかどうか判断していただこうということで、現在、県内外の有識者の皆さんに検討委員になっていただいて、県立美術館の構想というものを検討してきたところでございまして、現在大分検討が進みまして、その構想の大筋が、大まかなところが大体見えてきたという状況でございます。

そこで本日は、この基本構想の概要について皆さんに御説明いたしますとともに、新しい美術館は何のためにつくられるのか、それをつくることによってどんな可能性が開けてくるのか、そういったことにお詳しい講師のお話を皆さんにまず聞いていただこうと。その上で、この基本構想の検討委員の皆さんに、さらに講師の方にも加わっていただいて、講演で話のあった点を構想委員会ではどのように考えられてきたのか、そういったことについて壇上で議論、紹介をしていただこうと思っております。

最後には、先ほど司会のほうから案内もございましたけれども、そういったやりとりを踏まえて、御来場の皆さんからいろいろと御意見を頂戴し、よりよい美術館づくりのため、議論を深めてまいりたいと考えております。

したがいまして、このフォーラムの終わりのほうでは、皆さんにも忌憚のない御発言をいただくようにお願いいたしまして、私のほうからの開会の挨拶にかえさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○司会

引き続きまして、鳥取県立博物館副館長の尾﨑信一郎より、美術館整備に係るこれまでの検討状況を説明いたします。

○尾﨑副館長

皆さん、こんにちは。博物館の尾﨑でございます。きょうは、まず私のほうから、今どういうふうに美術館建設の準備が進んでいるかということについてお話をさせていただこうと思っております。皆さんのお手元にあるかと思います、今度つくりましたパンフレットを中心に御紹介していこうと思っております。

今、館長から話がございましたが、美術館の建設というのはしばらく前から我々が進めているところでございます。それでぜひ、鳥取県の未来のために美術館をつくりたいと考えておりますので、その思いをきょうはお話ししたいと思っております。

今、館長からもここに至る状況についてはお話ししましたので、重なるところは申しませんが、実は開館４０年以上たちまして、非常に老朽化、収蔵庫の過密化といった問題が浮き彫りになってまいりました。そこで一昨年度、２６年度に我々は検討委員会をつくりまして、今の博物館をどうしたらいいのかということを考えてまいりました。約１年間の作業を進めてまいりました。

その結果、現在ある３つの部門、このまま続けるのは難しい。その中で１つの部門、美術の部門を新たな美術館として新設してはどうかという考えがまとまっていったわけです。それに基づきまして、昨年度は鳥取県美術館整備基本構想検討委員会というものをつくりまして、きょうも委員の方が何人もいらっしゃっていますが、このような議論を進めてきたわけでございます。こういうふうに順番に我々は進めてきたつもりでございまして、しかし最近、なぜこの小さな県に美術館が必要か、あるいは果たして建設費に見合った美術館ができるのかという声も聞かれるようになりました。

そこで、改めて考えてみたいと思います。なぜ鳥取県に美術館が必要なのでしょうか。少し違った角度から、このことを考えてみたいと思います。皆さんはこれまでの人生の中で、最も幸福だった時間、瞬間ということを、すぐ思い浮かべることができるでしょうか。私は少なくとも一つ思い浮かべることができます。それは１０年ほど前のことですが、ウィーンの美術史美術館にまいりまして、この絵の前に立ったときです。

これはフェルメールの「絵画芸術」という作品です。フェルメールは世界に３０数点しか作品を残しておりません。その中で代表作といっていい作品ですが、もちろん画集等でこの作品は見なれておりましたが、その日、その美術史美術館で朝一番に入って、一人っきりでこの絵の前に立って３０分ほど、この絵とともにあった時間ほど私は自分が幸福であると感じた時間はありませんでした。それは、自分の一生というものがこの一瞬のためにあってもいいと思うほどの、非常に濃密な時間でした。もちろん私の場合はフェルメールですが、フェルメールである必要はありません。すぐれた美術作品、その実物の前に立つということは、常にこのような感動を生む可能性を秘めているのです。そして、それは美術館という社会的なインフラがなければ不可能なことでもあります。

今日、人口や生産力が減少し、経済成長を主要命題とした、これまでの私たちの生き方というのが根本的な転換を迫られています。私たちにとって、多くの品物にあふれた物質的な生活よりも文化的に豊かな暮らしのほうが意味を持ってきているのではないでしょうか。フランスのピエール・ブルデューという社会学者は、経済資本にかわる文化資本という概念を提起しています。資本というとお金のことばかり考えますが、文化資本というのは、例えば教養、あるいは学歴といった、形を持たない個人資産のことです。文化資本を充実させる上で、美術館の存在は地域にとって死活的に重要な意味を持つと思います。わかりやすくいえば、美術館が存在しないような地域には文化的な蓄積が育たず、住民の文化的成熟もあり得ないということです。今、鳥取県では盛んに移住とかUターンを若い人たちに働きかけていますが、もし皆さんが移住を考えている場合、果たして県立美術館さえないような地域に子供たちを連れていこうと思うでしょうか。つまり、鳥取県にとって美術館とは、必要どころか、それなくしては県そのものが成り立たなくなってしまうような意味を持つ施設だと私は考えます。

それでは、新しい美術館は何を目指すのでしょうか。日本で最後にできる美術館とはいえ、私は特に変わった目標を目指す必要はないと思います。

これにつきましては、基本構想検討委員会の中で３つのテーマを上げています。１つ目は、鳥取県の美術の継承と発信。２つ目は、内外の美術との接触と交流。３番目は、県民の創造性と鳥取県の魅力の向上というものです。ちょっと抽象的ですので、もう少し具体的に御説明いたします。

一つは、美術館の大きな使命というのが、私の考えでは４つあります。収集、展示、研究、教育普及です。まず、収集に関しましては、これまでの博物館の蓄積を生かしまして、鳥取県にゆかりのある美術作品を中心に収集、保管していきます。それによって、鳥取県にゆかりのある重要な作品というのを未来の世代に、子供たちに渡していくという作業になります。同時に、これは展示とかかわりますが、施設が大きくなりますと常設展示室が広がります。そこに例えば前田寛治の部屋、辻晋堂の部屋といった館蔵の名品を網羅的に並べることによって、美術館としての魅力を増そうと思っております。

次は展示です。展示につきましても、これまでどおり展覧会を続けていきます。収集はやはり県内の作家というものが一つの柱になりますが、展示についてはいろいろなジャンル、あるいは国内外の名品を皆さんに見せていく機会をつくっていきたいと思っております。また、これまで余り博物館が取り上げなかったポップカルチャーとか、そういった新しい分野の、ほかの観客層を呼べるような展覧会も開いていきたいと思っております。あるいは館内にフリーゾーンですとか、野外にオープンスペースを置いて、彫刻を置いたりして、館の周り全体に楽しめる環境をつくっていきたいと思っております。

３番目に教育普及です。これにつきましても、現在もかなりしっかりやっているとは自負

しておりますが、今後は、例えばワークショップ専用の部屋をつくりまして、そこでさまざまなプログラムを実施する。特に子供たちを対象とした展覧会とかワークショップを開いていきたいと思っています。それで、まだ検討段階ではありますが、例えば県内の小学校３年生ないし４年生の１学年を全部美術館に招く、これは例えば金沢２１世紀美術館なんかがやっていることですが、そういったことを県でもできないかということも今検討しております。

それで、さっきも言いました作品の研究ということはもちろんやってまいります、作家の研究、作品の研究。それとともに、地域とのいろんな協働の作業を続けていきたいと思っております。具体的には、ボランティアのスタッフを募り、あるいは美術サークルとかＮＰＯ団体との協働、あるいは館内で絵画教室とか陶芸教室を開いたり、あるいはキッズルームとか絵本の読み聞かせのできるスペースをつくる、あるいは国内外から作家を招いて、アーティスト・イン・レジデンスといって、滞在制作を館内でやっていただく、そういうことをやっていきたいと思っております。

今言った機能を考えまして、それをもとに我々は具体的に美術館の規模を想定いたしました。それで、これも検討委員会の中で詳しく検証した点ですが、例えば展示室としては常設がそれぞれの部門ごとの展示室を設けて１，２００、それから企画展示室が１，０００平米、そういった細かい積み重ねをしております。

そういった積算を続けまして、大体美術館の規模が決まってまいりました。ただ、この規模といいますのは、あくまでもモデルというか、私どもが一つの方向として考えたものでして、今後その規模が若干変わることは十分にあり得ますが、その結果、全体として約１万２，０００平米の延べ床面積を持った美術館をつくろうと考えております。１万２，０００というとちょっとわかりにくいかもしれませんが、米子の方はよく御存じだと思いますが、松江にあります島根の県立美術館がほぼ一緒でございます。ですから、あの規模のものを鳥取県内につくろうと考えております。それで、さっきも申しましたように、これはさっきの機能に基づいて積み上げてきた結果として計算したものでございます。それが出ますと、大体建築の工事費が出てまいります。今のところ、そこにも書いていますように、約７０億から１００億の工事費を予定しております。これにつきましても、先ほど申しましたように、これからの工夫などによって若干の上下はあるかと思いますが、約８５億というところで申しております。それで、これが高いかというと、確かに大変なお金ではあるのですが、例えば倉吉の未来中心が１２０億、それからこの近くのとっとり花回廊が１８０億、あるいは鳥取の布勢運動公園が２４０億で整備しておることを考えると、文化とそういった分野とのかかわりでどうかということは、皆さんに御判断していただきたいと思います。

運営費につきましても、そこに書いておりますように毎年の運営経費総額として３．９億円程度を見込んでおります。これに対して、そこにも書いておりますが、逆に、美術館ができることによった経済波及効果というものを我々想定しておりますし、それから整備に当たりましては、民間の資金やノウハウを導入する、指定管理方式を導入、あるいは建設に当たってもＰＦＩという手法を導入することが可能かどうか、それをまさに今、検討しているところでございます。

このような検討がほぼ終わりつつありますので、我々はこの計画を示すとともに、場所について、市町村に立地の場所を聞きました。私どもとしては、一つはさまざまな人が気楽に訪れることができる場所、アクセスがよい場所ということ。それから、地域づくりとかまちづくりに貢献できるということ。それから、必要な施設がより安価に整備できるということを条件にして場所を選定していこうと思っております。この作業を今、やっておるところでございます。

こうしてほぼ我々の作業は終盤に差しかかっているわけでございますが、最後に、新しい美術館ができると何が変わるかということを考えてみたいと思います。もちろん、今上げたようなさまざまなメリットがあります。その中でも、これまで基本構想検討委員会の中で多くの委員の方が指摘され、我々も間違いなくその新しい美術館にとって重要だと考えておりますのは、子供たちの存在です。私たちは、子供たちを新しい美術館の主要なターゲットと

考えております。先ほどブルデューという社会学者の名前を引きましたが、ブルデューは文化資本について興味深い事実を指摘しております。それは、美術館に自発的に通う人々は、大半が幼いときに親に連れられて美術館に通った経験があり、子供のころの美術館の体験と成人してからの美術への関心との間に有意な関係が認められるということです。美術館に行く家庭に育てば美術に親しみが湧き、美術館に行かない家庭からは美術に関心を持つ人は生まれない。ここで文化的格差というものが固定化されていくわけです。このような状況の中で、県立の美術館が存在しないということが鳥取県の未来にとってどのような意味を持つのか、今、まさに私たちは真剣に考えるべきときに差しかかっているのではないでしょうか。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○司会

続きまして、基調講演に移ります。

御講演をいただきますのは、和歌山近代美術館の熊田司館長です。

御講演に先立ちまして、講師の紹介を申し上げます。

熊田先生は１９４９年、兵庫県神戸市のお生まれです。関西学院大学大学院文学研究科を修了された後、西宮市大谷記念美術館、ふくやま美術館、大阪市立近代美術館建設準備室にお勤めなされました。その後、２０１２年より現職の和歌山近代美術館館長を勤められておられます。専門は日本の近代美術で、規模の異なった多くの美術館に勤務された御経験をお持ちです。とりわけ、以前より計画されながら、いまだに実現されていない大阪市立近代美術館建設準備室での御経験は、新しい美術館を計画中の本県の事例にとっても多くの参考となるものと考えております。

基調講演の演題は、「鳥取の美術館に期待するもの」です。

それでは、熊田先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

○熊田氏

今、御紹介をいただきました和歌山県立近代美術館の熊田と申します。

こういうフォーラムは、きょうが最初だということで、私もいろいろとリクエストをいただいたのですが、何を話せばいいのかちょっとよくわからない面がございまして、十分皆さんの関心のある話題を提供できるかどうか心もとないのですが、私のお話しできることといえば、今、御紹介いただきましたように、いろんな美術館を渡り歩いてきまして、そして、主に建設準備に携わったことも結構ありますし、その辺の体験を申し上げて、そこから何かもし得るものがあれば、御参考にしていただければなということで、きょうのお話をさせていただきます。

現在、和歌山県立近代美術館に勤めているわけですけれども、この私の容貌、見た目をごらんいただければおわかりになりますように、もう既に大阪市を定年退職しまして７年ほどたっております。非常勤の館長という立場なのですが、ということで、美術館の学芸員という職業について、もうかれこれ４２年ぐらいになりますか。とても古い人間でございます。

この間、この４０年余りの間に日本の美術館というものは、劇的に増加いたしました、数がふえました。そして、そのたくさん増加した美術館の活動というものは、成熟を迎えというふうに普通は考えたいところですけれども、実は数年前に「美術館・冬の時代」ということもささやかれたりしまして、メディアでもかなり書かれたこともありますし、決して順風満帆に今日に至っていると、こういうことは言えないと思います。今もまだ「美術館・冬の時代」という、その名残を引きずっているような状態、これが現状だと私は思っております。世間では、例えば就職戦線の超氷河期という、やはり冷たい、もう凍えそうな時期、就職の超氷河期という言葉も使われたりしましたけれども、この就職戦線においても少し好転の兆しが見えているように伝えられておりますが、美術館界におきましても氷河は少し緩んできまして、氷河期と氷河期の間の間氷期に差しかかっているという、そういう兆しも感じられないこともありません。

いずれにせよ、就職と同じように、経済状況の影響というものをもろに受けるのが文化と言えると思います。とりわけ美術文化をすくい上げて、そしてそれを先ほど尾﨑さんの話にもありましたように収集保存し、あるいはまたその美術の新しい芽を育成するためのアクションを起こしたりする、そういう装置としての美術館あるいは博物館というものは、予算的な裏づけがなければ機能しないわけですから、やはり経済的不況によって深刻な影響をこうむる、これは当然だと思います。バブル経済、随分昔になりますけれども、それがはじけて、失われた１０年、あるいは２０年ということが言われましたけれども、そういった時期を経過するうちに、公立美術館の新設あるいは開館、そういうこともめっきり数が減ってきた。また、既存の公立美術館は年々歳出予算のシーリング、シーリングということが続きまして、ほとんど骨と皮だけのような厳しい予算状況の中で、言ってみれば創意工夫も底をついてしまって、作品資料の保存、収集はおろか、展覧会事業も満足に行えないような青息吐息の苦境に立たされているというのが、これは大方の状況だと。それは実は、私の勤めております和歌山県立美術館が、全国の美術館の中でも最も予算がタイトであって、少ない。この私の職場を念頭に置いての言いぐさなのですけれども、例外ももちろんあることと思いますが、大体において私ども美術館の現場では、そのような感じがしている。

しかしその中で、鳥取県のような新しい美術館を建設しようという計画をお持ちの県があるという、そのことに対しては、今の私の職場から考えると、頭が下がる思いがする、そうした全国でもまれな事業ということで、この鳥取県の美術館計画に対する私の期待と、それから一種敬意を持っておりますけれども、その念をお話しさせていただく機会を本日は与えていただいたものと、そういうふうに理解をいたしまして、私の美術館に対する思いの一端を述べさせていただきたいと存じます。

私は、大体個人的な話に、全体なってしまうと思って恐縮ですけれども、お聞きいただければ幸いですが、美術館勤めをするようになりましたのは、決して子供のころから美術館の学芸員になりたいとか、そういった志を持っていたということではなくて、どちらかというと偶然のような成り行きからでございました。大学を卒業するのが近づきまして、先ほど言いました近年のようなシビアな就職状況ではない、そういう牧歌的な時代だったのですが、何となく怠け者だったので、私は特にこういう会社に勤めたいとか、そういうこともなくて、何となく就職がうっとうしくて、結局就職試験は受けずに大学院にそのまま行くような、特に学問に燃えていたからではなくて、そういう状況で大学院に入りました。高校時代から美術、どちらかというと絵を描くことは好きだったわけですが、大学においても、それから大学院においても美学美術史というのを専攻しまして、実作ではありませんけれども、美術にかかわりを得る、そういう学問の道に進んでいたわけですが、大学の卒業論文をまとめる段になりまして、それまで西洋美術が非常に好きだったのですが、何を考えたのか、日本の近代美術というものをひとつテーマにしてやろうと考えました。日本の近代美術を、いってみれば批判的に検証し、あるいは議論する、そのことによって日本の近代の問題というものを美術のほうから明らかにしたいと思い、また、これを踏まえて、この後の美術、来るべき美術というものがどういうものであるべきかという展望を得ようとか、結構大それた考えを持ちながら、日本の近代美術を卒論テーマにすることにいたしました。それから修論でも、卒論は高橋由一、それから卒論は青木繁という明治の洋画家たちを取り上げたわけですが、結局このことが私の美術館学芸員への道につながることになると思います。

当時、私の大学院は割と緩い感じだったので、在学中から就職してもいいということになっておりましたので、神戸の非常に小さな香雪美術館という、朝日新聞社の村山という社主が集めていたコレクションをもとにする美術館ですが、ここに潜り込みました。ただ、この香雪美術館は神戸の御影というところにありますけれども、古美術とか仏教美術がコレクションの主体でして、私の専門領域とは関係なかったわけですけれども、それでも重要文化財があったりしまして、物に直接触れ、あるいは専門外の美術の領域にも広い目くばせができる、視野が得られたという点で、決して無駄ではなかったと思います。

ここには１年と少ししかいなかったのですが、次に、神戸市の東側にあります兵庫県西宮

市というところで、西宮市大谷記念美術館というのがその二、三年前にできました。財団ではあるのですが、それから個人コレクションをもとにしているのですが、半ば公的な美術館ということで、ここに勤めまして１０年あたりを過ごすことになります。こちらの美術館は、数は決して多くないのですが、日本の近代美術がコレクションの主体であって、それから、コレクションが余り充実していないということから、次から次へと企画展を開催するというスタイルの運営方針を持った美術館でありました。半公立的な美術館ですから、西宮あるいはその周辺の兵庫県の南部の東側ですね、阪神間と言われる地方ですけれども、この地域の作家たちの発掘をし、検証をするという、そういう企画を次々に立てて実施をしていくというやり方であり、実質的にここでの仕事が私の学芸員のスタートということになります。少ない予算ながら、美術品購入ということを初めて手がけたということで、私の学芸員としての振り出しは、この西宮市大谷記念美術館というところになりました。

この２つの小さな美術館、いずれも割と開館して間もない時期だったのですが、このころは、今から４０年ほど前の話ですが、全国的に美術館は非常に数が少なく、兵庫県におきましては白鶴美術館、滴翠美術館、神戸市立南蛮美術館といった、いずれも個人コレクションが基礎になりました歴史の古い美術館があるほか、１９７０年に開館したばかりの兵庫県立近代美術館というものがあった、それだけだったという時代でございます。関西全体を見渡しても、今申し上げましたような個人コレクションの美術館は別として、戦前に京都市美術館、それから大阪市立美術館という２つの美術館が開館して、既にあったわけですけれども、そのころの活動実態は、どちらかというと日展とか二科展とか、そういった団体展の会場としての機能というものが優先される、少なくとも外目にはそういう施設であった。その一方で、新聞社が戦後は特に活発にやりましたけれども、派手な海外の展覧会ですね、ルーブル美術館展とか、ツタンカーメン展とか、いろいろやりました。こういうものの会場としての機能が、日展などの団体展とともに、そういう特別展の会場という、その２つの機能が非常に優先され、しかし、そのことによって、割と人々からは親しまれた、そういう美術館であったわけです。

しかし、美術館が自前の企画をもって展覧会を行う、今日からいうとそれこそが美術館だと思うのですが、そういう美術館というのは、関西地区でも国公立としては国立近代美術館の分館としてスタートしました京都国立近代美術館、これは１９６７年の開館ですけれども、これが唯一であったと言っても過言ではないでしょう。奈良と京都に国立博物館がありましたけれども、これは今、東京国立博物館も同じですが、中身は美術館なのですが古美術が中心ということで、博物館という呼ばれ方をしていた、今日でもそうですけれども、古美術中心の美術館がほかにあっただけです。ということで、いわゆる近代美術館というものは、それよりも大分前ですけれども、戦後、早い時期ですね、１９５１年に鎌倉に神奈川県立美術館が開館し、その翌年には東京に国立近代美術館、現在の東京国立近代美術館が開館したのが日本における近代美術館というもののスタートということになります。

近代美術館というものを世界的に見ますと、ＭｏＭＡと略称されますが、ニューヨーク近代美術館が１９２９年に開館しておりまして、その後、各地に近代美術館という名前を冠する美術館がぽつぽつとあらわれ、そして、戦後になりまして１９４７年、今度はフランスにパリ国立近代美術館が誕生しました。こういう流れが日本にも伝わり波及した、それが鎌倉と東京の近代美術館ということになると思いますけれども、ニューヨーク近代美術館を初めとする近代美術館の基本的なコンセプトは、いわゆるモダンアートです。これは直訳すれば、それこそ近代美術ということになるわけですが、モダンアートを扱うということが基本的なコンセプト。そして、収集や企画の対象も、それまでの例えばメトロポリタンとかルーブルとか、そういったミュージアムとは異なる考え方、あるいは展示手法というものを大胆に導入いたしまして、新しい時代を築いたということが言えると思います。この辺の細かい説明は、時間がありませんので省略させていただきますけれども、そのミュージアム・オブ・モダンアート、このモダンという言葉ですが、近代と今訳されております。ただ、元来モードという言葉が語源になっておりまして、例えばフランス語でアラモードという言い方、これ

は今流行のといった意味になりますが、もともとは近代というより現代、あるいは今日、まさに今というのがモダンという言葉だったわけです。したがって、ニューヨーク近代美術館も１９２９年開館当時は、その時点でのいわゆるモダン、現代と言ってもいいと思いますが、すなわち印象派の時代、これは１９世紀の最後の四半世紀に大体該当すると思います。それから、最も新しい美術の動向であるシュルレアリスム、超現実主義とか、あるいは抽象美術の時代まで、言いかえますと、２０世紀最初の四半世紀、この５０年間をまさに今の時代というふうに捉えて、その今の時代の美術を、今の時代の目、今の時代の物の見方で捉えて、そして展示や何かに反映していこうと、そういうことから、収集も展覧会企画も展開して、新しいタイプの美術館ということですね、一種のプロトタイプ、原型を打ち立てたのがこのニューヨークＭｏＭＡということになります。

しかし、そのＭｏＭＡが開館した１９２９年から既に９０年近くがたっておりますし、日本国内におきましても神奈川県立近代美術館からでも６５年がたつ。近代という、モダンという言葉が、現代というよりは近代というふうに少しずつ意味がシフトしてきた、ずれてきた。ニューヨークのＭｏＭＡが視野に入れた時代というのは、日本では明治・大正期と大体一致するわけですが、既に日本の近代美術館が動き出した時代には過去となりつつある、歴史になりつつある、そして、やや色あせた、印象がちょっと暗い、そういう過去の時代というイメージになってきたわけです。

ニューヨークの場合は、そういうふうに時代が変わっていく中で、常に現代の目といいますか、それを更新しつつ自分の視野に取り込みながら脱皮を重ねて、ニューヨーク近代美術館の名称は変えていないのですけれども、最新の美術に常にかかわり合おうという、そういう姿勢を貫いている美術館です。これが今日でも近代美術館というものの一種の原型的なスタイルだと言うことができるのですけれども、日本の近代とか近代美術というと、やはり明治・大正、それから昭和・戦前期ぐらいが常識的にはイメージされる。そして、この名をつけた美術館は公立美術館に多いのですが、近代美術館が全国にふえましたけれども、今からすると少し地味で聞き飽きた語感があるということで、最近では「近代」というものを美術館名から外してしまおうと、そういう動きもあるように思います。

兵庫県立近代美術館のことを申し上げましたけれども、鎌倉、東京に次ぐくらい歴史のある古い美術館なのですが、２００２年に建てかえまして、現在地に移転した。そのときに「近代」を抜きまして兵庫県立美術館という名称で開館しておりますし、また、私がかつておりました大阪市立近代美術館建設準備室、これもつい３年ほど前に名称が大阪新美術館建設準備室というふうに変わりました。何か近代というものが負のイメージに思っているような感じすらするような動向ですけれども、ほかにもまだあると思いますが、最近いろんな美術館関係者にお話を聞きますと、一番客集め、集客に苦労する展覧会が日本の近代美術の展覧会であると。嘆きに似たことを耳にすることが多いのですが、先ほどもちょっとお話ししました京都市美術館というのがあります。古い、戦前からの美術館ですけれども、ここは「近代」の名はついていないのですが、いわば京都画壇の展示場ということで、団体展の会場にもなりましたし、それから新聞社の特別展の会場としても使われた、そういう性格が強かったのですが、学芸員諸氏の奮闘で、京都画壇コレクションを常設展示し、あるいは企画展に展開する、さらに現代美術展も開くというふうに、努力によっていわゆる近代美術館的な性格を強くしつつあったのですが、今度いよいよ大規模に改修、建てかえが行われるそうですが、その改修に向かって、今の美術館でやる最後の企画展が若冲展ということなのです。ということで、東京で随分、５時間待ちとか、すごい人気があった展覧会だと思うのですが、京都の近代絵画、近代の京都画壇のまさに展示場であった京都市美術館が、最後の記念すべき展覧会に若冲を持ってくるという。もちろん近世美術であっても、先ほどＭｏＭＡのところで申し上げたように、今日の時代の目からそれを捉え返して、まさに現代にマッチするような展覧会に仕立て上げるという、そのことには大いに意味があるとは思うのですが、私のようにずっと近代美術に携わってきた者にとっては、この辺のところは少し寂しい気がするなという、それほど日本の近代美術というものは、少し今忘れ去られようという、こちらも

冬の時代を迎えているようなことが考えられます。

ちょっと話が横道にそれましたけれども、兵庫県立近代美術館が１９７０年に開館して以降、都道府県、それから政令指定都市が次々と美術館を建設しました。館によって、それぞれ固有の性格を持って、基本方針に従って作品資料の収集保存、調査研究、展覧会、そして教育普及というものが行われ、その対象は必ずしも近代に限るということではなかったのですが、大体において公立美術館というのは、いわゆる近代美術館というスタイルの美術館が多かったように思います。明治以降の近現代美術、とりわけ日本の各地に生まれて中央に出て活躍をした美術家たち、あるいはその地方にとどまって人知れずすぐれた仕事を続けた人たち、いろいろいるわけですが、それぞれの地域に分厚い美術の伝統というものが実は残されておりまして、それをこれら公立美術館ができることによって発掘し、再発見しといった作業が行われる。それをミッション、使命として、地方公立美術館が行い続けた、それが地方の公立美術館だったと、大体概括できると思います。

全国津々浦々と言っても過言ではない多くの美術館で、こういう地道な学芸員たちの仕事が積み上がっていきまして、日本の明治から戦後に至る知られざる美術が調査研究をされ、文化財として保存、そして活用されることで日本の近代美術についての知識、知見というものも格段に厚みを増してきたことは、私としては驚くべきことだと思います。学生時代に私、高橋由一などをやっていたのですが、日本の近代美術について論文を書こうとしても、なかなか文献が見つからない、途方に暮れることもある、そういう状態でありました。それが数十年たちまして、今日、日本の近代美術を調べようとしますと、まずは全国の美術館が営々として展覧会を開き、そして図録にまとめてまいりました膨大な文献資料というものがありまして、これに当たるとほとんどの作家、あるいは事象が網羅されていて苦労をしない時代になって、私なんかには本当に隔世の感があるわけです。これ一つをとってみても、公立美術館というものが全国各地に整備されたことには、非常に大きな意義があったと思います。

しかし、全国の公立美術館は、以上申し上げたような日本近代美術という文化財の保存だけに力を注いだのではなくて、多くの美術館ではニューヨーク近代美術館ができたときの理念といいますか、そういうものを一部共有する形で、地域の住民に新しい物の見方、美術の見方を提示し、あるいは地域から新しい美術が生まれるための土壌づくりにも力を注ぎ、そして、とかく難解と思われがちな現代美術を初めとして、いろんな美術を身近なものにするためのアクセスとも、あるいはきずなとも言える。教育普及活動にもいろんな工夫、努力を凝らした結果、日本の美術文化も成熟の時代を迎えたのではないか。今や美術館に足を運んだことのない人のほうが少数派なのではないかなと、調べたわけではないのですけれども、そんな気がいたしまして、少なくとも美術館というものの社会における認知度は、確実に伸ばしてきていると思います。

地域に眠る美術文化の鉱脈を掘り起こして、それを展覧会の形で再評価、検証し、そしてそれを収集につなげて、地域文化財の蓄積を重ね、さらにそれを、何度も言いますけれども、今日の時代の目で捉え返し、そして今の時代の美術も紹介する、そういう活動で、伝統とそれから今日性といいますか、アクチュアリティーと言ってもいいのでしょうけれども、その２つが接触することによる新しい感性や知性というものがその中から生まれてくると思うのですが、そういう場を形成する。そして、先ほども尾﨑さんの話にありましたが、子供を中心とする若い世代を巻き込んでいくという、それが将来にわたって、新しい文化の創造の核になっていくという、そういった好循環ができることによって、地域全体が活性化するための一つの欠くべからざる装置として、そういうことを起こす機能を持つ装置として美術館がある。そういう自治体、都市も全国を見ればあるように思います。

それは非常に好ましいことですが、私は、先ほど言いましたように、西宮市大谷記念美術館に１１年余り勤めまして、その後、広島県のふくやま美術館に赴任しました。これも３０年ぐらい前の話ですけれども、そのふくやま美術館に赴任したときには、もう既に建築が始まっておりまして、全体計画には余りかかわらなかったのですが、作品収集、それから開館当初の展覧会計画には直接携わったという形で４年間ほどおりました。

そうした展覧会を開く中で、とても印象に残った一つの出来事を御紹介しておきたいと思いますが、２０世紀のイタリア美術というものを一つの収集、あるいは展覧会のテーマにしていた美術館でございましたので、開館何度目かの展覧会で１９８０年代のイタリアの新しいデザイン運動、メンフィスという名前をつけた運動ですが、これの展覧会をすることになりました。いわゆるモダンデザイン、機能主義とかあるいは幾何学的な構成をとるスタイル、そのモダンデザインを突き抜けるポストモダン、あるいはネオモダンという言い方をするのですが、そうしたデザイナーのグループでエットレ・ソットサスというとても有名な人がいるのですが、それから日本の倉俣史朗という人もこれに参加した。そういう新しい、いわゆるインテリアデザインが主体ですが、それを展覧会にしまして、たくさん家具の類いを展示したのですが、これが実は福山という町に影響力、予想外に浸透力を与えたということが非常に記憶に残っております。

展覧会が終わるか終わらない時期だったと思うのですが、福山の駅前のショーウィンドーをのぞきますと、いきなりソットサスとかそういうメンフィス風のデザインで構成したウィンドーディスプレーがあるのを見つけました。直接的な模倣なのですが、しかし、一つの美術館の展示が町のメーンストリートのディスプレーにまでいきなり影響を与えるということが非常に私は驚きでありまして、福山は北のほうに府中という家具の産地がありまして、婚礼家具でとても伝統的な、デザインとは無縁といった家具の産地だったのですが、こういうところに、その後こういうデザインの展覧会の影響が多分及んだのではないかと私には感じられまして、とても新鮮な思いをいたしました。

今、私の経験の中から公立美術館のことを申し上げてきたのですけれども、全国的に見て、都道府県あるいは政令指定都市で、近代美術館的な美術館を持たない数少ないところが、大阪と鳥取ではないかと思います。大阪は日本ではナンバー２の都市圏、その中心である大阪市にいわゆる近代美術館、２０世紀型の美術館というものが存在しないのは意外としか言いようがないのです。天王寺に大阪市立美術館というのが、先ほどから言っておりますが、戦前からありましたけれども、これはどちらかというと古美術中心で、古社寺が持っている国宝や重要文化財を文部省の命令で展示する美術館ということで、関西では奈良博、京博に次ぐ第３の博物館と言ってもいいような施設としてスタートした。そして戦後、進駐軍に接収をされ、非常に荒廃したわけですが、進駐軍から返還された後はやはり日展を初めとする団体展の会場というのが中心的な役割となり、特別展を開催することもありましたけれども、その両方でイメージされるような美術館、そういう時代が長く続いたように私などには記憶されております。団体展に占領されるような時代がずっと長く続いたわけですが、その後、地下にギャラリーをつくってそちらに団体展が移りましたけれども、展示内容はもともとの趣旨に近い、古美術が中心の美術館ということで、大阪の美術館ですから、大阪の近代美術の収集とか企画展も多少は行われたわけですけれども、ほとんど目立たなかったと、そういう実情があります。

大阪というまさに現代的な活気のあふれる都市に近現代美術館がないというのはおかしい、ぜひともつくってほしいというのは、実は随分以前からあったようです。１９７０年の大阪万博が終わった後は、万博美術館を改装して府立美術館にせよという請願が住民から起こされたこともありますし、これは後に国立国際美術館になるわけですけれども、それからまた大阪の中心部、梅田の再開発に伴いまして、新しい近現代美術館をつくろうという構想もあったようです。

しかし、今日に至るまでできていないわけですが、１９８３年に都市計画の一環として、大阪の中之島というところに、一番中心部ですけれども、ここに近代美術館を建設しようということが、大阪市政１００周年を記念して、その事業として都市計画の中に盛り込まれたのが、今に続く大阪の新美術館のスタートです。同じころ、佐伯祐三という日本近代の非常にすぐれた洋画家、この作品が４０点ほど一括寄贈を受けまして、コレクションの核ができる。こういったことが重要な契機となりまして、１９９９年に近代美術館の建設準備室が設置されました。そのとき私が福山から大阪に赴任いたしまして、近代美術館の準備室という

ことで建設準備に携わってきましたけれども、とうとう定年に至るまでできなくて、それ以後さらに７年近くたっているのですが、オリンピックの次の年の２０２１年に一応完成するという、今そのようなことで決して停滞はしていないようですが、まだできておりません。大体私は六、七年ぐらいでこの美術館はできるだろうと思って、そちらに移動したわけですけれども、できておりません。

ちょっと長引いていますね。もう少しいいですか。１９９０年ごろ、大阪市だけではなくて、大阪府のほうにも現代芸術センターというポンピドゥー・センター型の現代美術を中心とする総合芸術センターを建てようという計画があったものですから、大阪市のほうはいわゆるオーソドックスな近代美術館ということで、２０世紀の美術のすぐれた名作を体系的に見られる日本で唯一の美術館というのを、実は目指しました。ということで、購入基金が当初かなり潤沢にあったものですから、世界的な名作といってもいいような作品を結構集めることができました。そして、日本の大都市では最後の近代美術館、そして２０世紀恐らく最後の美術館になるだろうという思いもありまして、何としても国内有数の、それだけではなくて、世界に向かっても誇れるような美術館をぜひともつくりたいと、そういう一心で名作を集め、そしてそれを欧米の美術館のスタイルであるパーマネントコレクションという、基本的にある場所に行けば、名作に出会えるという常設展示を主体とした展覧会をつくろうと。しかし、それだけではなくて、もちろん斬新な企画を次から次へと開いていって、まさに大都市の中核にある美術館として、周辺の美術文化だけではなくて、町全体の活力にも刺激を与えられるような施設をつくりたい。いろいろと計画を凝らしたわけですが、残念ながら今日に至るまでできておりません。

幾つも遅延の原因というものがあったのですが、一つは、高額な土地を国から払い下げを受けて購入いたしまして、いざ建てようとして土壌調査をすると、有害物質が含まれている。土壌改良しないといけないということで、これにも１年、２年とかかりましたし、それから、もともとわかっていたことなのですが、広島藩の蔵屋敷という近世の非常に重要な遺跡が下に眠っているということで、これの発掘調査、それからそれをどういう保存の形をとっていくかということを考えることにも１年かかりました。こういったことは美術館を建てる、新しい公共建造物を建てるには、くぐらなければいけないステップということで、仕方がないと言えば言えることですが、その次に参りましたのが財政非常事態宣言という、大阪市が失敗しましたオリンピックの誘致というのがありまして、オリンピック誘致に非常に動いていたのですが、それが失敗に終わると、今度は財政状態が非常に悪いということが明るみに出てしまいまして、非常事態宣言をするということで、当分凍結のような状態になった。さらにそれを少し越えまして、しかし、国との約束もあるから建てないといけないということで、少しでも費用を抑えて合理的に建てる、その建設手法をいろいろ考えろということでＰＦＩの研究ということに、これも１年、２年とかかった。それから、大阪市にはほかに美術館が２館、それから博物館が２館ほどあるのですが、これら全体を統合して地方の独立行政法人ができないか検討したいということで、言ってみれば、申しわけないですが、検討倒れのようなことで１０年ぐらいを費やして今日に至っているということになります。

その間、美術館ができなかった２０年間というものは、例えば心斎橋に展示室を借りて所蔵品を出してみたり、企画展も少しやったりということで、いろいろやったのですが、それは持続的なものではないということで、散発的な活動に終わったということが否定できないということで、この２０年間の間に、大阪の美術状況というのは、実は美術館ができなかったことによって、どんどん低下していったように私は感じました。大阪の近代美術の作品、大阪画壇というものがあるのですが、そして、大阪の町にはたくさん残されていたのですが、これがどんどん海外流出していくということが実はありまして、例えば大英博物館とかアメリカのシアトルあたりのコレクター、あるいは美術館といった、大阪の近代美術が安いものですから欧米にどんどん流れていって、そういう文化財の蓄積も脅かされようとする事態が起こっている。それからまた、作家たちの活動の場、情報発信の場がなかなかできなかったものですから、若い作家たちの創造力自体もちょっと発表場所がない、発信場所がないとい

うことで、それから町のギャラリーも非常に停滞していったという中で、少し弱まってきているのではないかと、非常に危惧を抱いております。大阪はそういうことで美術館のコレクションという点では、かなりいいものが集まって、今か今かと出番を待っている状態なのですが、美術館ができないということが長く続くと、やはりバブル後の失われた１０年、２０年ではないですけれども、美術文化という面にもそういうことが起こってきて、言ってみれば美術的な創造力のデフレ現象といいますか、デフレスパイラルに捉えられてしまったような、そんな感じが

〔テープ中断〕

の力を全面的に発揮するために、ぜひとも新しい美術館を建てていただいて、私も余り知りませんけれども、環日本海圏文化というのですか、それの中心地としてまさに発信するような活動ができる場をおつくりになればと期待して考えております。

私もこの鳥取県の美術館の計画にも、大分以前からこういう計画がおありだったようで、少しかかわったこともあるのですが、鳥取市の西側の湖山池の上のほうにつくろうという計画があったこともありましたが、それは前知事が決断して一旦凍結されたということで、結果として非常にアクセスの悪い場所だったようですから、凍結されたことは逆に英断ではなかったかなと私なんかは思っております。そのかわりといいますか、ちゃんと美術振興課というのですか、つくられて、美術館のスタッフは集められましたし、それから購入予算もしっかりつけていくということで、ソフトをしっかり充実させるという施策をとってこられたこと、これはとてもいいことだと思いますし、そして、いよいよこの果実がまさに実を結ぼうというところに来まして、この新しい美術館の建設計画が動き出したということで、まさに今をおいて好機はないと思いますし、ぜひとも新しい美術館をお建てになって、これまでの活動をさらに充実したものとして展開できる場をつくっていただければなと期待をしております。

最後ちょっと省略してしまいまして、余りまとまった話になりませんでしたけれども、鳥取の新美術館に対する期待を述べさせていただきました。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会

どうもありがとうございました。熊田先生には経験をもとにお話しいただきまして、鳥取県の美術館を考える上で非常に考えさせられることを御指摘いただけたと思います。熊田先生には、この後のパネルディスカッションでもお話を聞かせていただくことになっておりますので、よろしくお願いいたします。

これで基調講演を終わりますが、この後、次のパネルディスカッションの準備をいたしますので、しばらく皆様、お待ちください。

〔休　　憩〕

○司会

それでは、パネルディスカッションに移ります。

まず、壇上の皆様を紹介いたします。

コーディネーターとして、鳥取県美術館整備基本構想検討委員会会長の林田英樹様です。（拍手）

パネリストとして、先ほど基調講演をいただきました熊田司様です。（拍手）

そして、鳥取県美術館整備基本構想検討委員会委員の半田昌之様、同じく衣笠幸雄様、同じく谷本里美様、以上の皆様にお願いしております。（拍手）

それではコーディネーターの林田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○林田氏

皆様、きょうはこの会によくおいでくださいまして、ありがとうございます。

私は、今御紹介いただきましたように基本構想の検討委員会の委員長を仰せつかっており

ますけれども、その前には、話がございましたそのさらに１年ぐらい前から始めました現状課題検討委員会からかかわっておりますので、もう大分長い間この問題にかかわってきている気がいたします。私自身は文化庁で働いておりましたし、国立の美術館でも働きましたので、この検討を進めるに当たっては、我がふるさと鳥取にぜひ立派な美術館ができてほしいものだという気持ちでずっと参加してまいりましたので、そういう立場であるわけですけれども、この検討が大分煮詰まってまいりまして、少し伸びましたけれども、この夏から８月ぐらいまでにはある程度の我々としてのまとめをしようという段階になってきました。

我々が検討委員会で議論を進める一方では、大分、県議会や新聞等でも話題になるようになってきたと聞いておりますけれども、かなり具体的な議論になってまいりますと、鳥取県に本当に県立美術館が必要なのか、どれだけの財政負担がかかるのかとか、どんな役割が果たせるのかと、かなり詰めた議論が行われるようになり、かなり本当に必要なのかという議論も行われていると聞いております。ある面では、それは当然なことだろうとも思うわけでございまして、県にとって大変大きな決断であるわけですし、どんなものができるか、またどんな運営が行われるかということについても、とても大きな影響があることですから、大いに議論をしていただいて、詰めた構想を練っていただいて進んでいただければと思っております。

きょうはそういう段階で、このフォーラムも県民の皆様に、これまでやや構想委員会が先走りをしておって、県民の皆さんの議論が深まっていないのではないかという懸念がいろんなところで出されているものに対しまして、もう少しそういう議論をパブリックに交わしていって、御議論を深めていただくための一助になればということで開かれたと思っておりますけれども、そういう意味で、きょうは基調講演をいただきました熊田先生、それから検討委員会で御一緒しておりますお三方に加わっていただいて、こちらで少し我々の考えを整理してお伝えをした後で、皆様方からもぜひこんな点はどうなのかという御指摘をいただいて、できるだけ対話をさせていただければと思っておりますので、ぜひ積極的な御参加をいただければと思います。

それで、時間が少し押しておりますので、恐縮でございますが、当初の予定は３時ということだったと思いますけれども、時間をもう少し頂戴して、今のような議論ができればと思っておりますので、この点御了承いただければと思います。

最初に、私のほうからパネリストの皆さんにお尋ねしたいと思っておりますのは、確かにこれだけの大きな投資をして、県立の美術館を新しくつくることが必要なのか、それも４７都道府県の中で言ってみれば一番最後になって構想しているような、さらに２０年前には一度浮かび上がりながら取りやめになったような経緯を踏まえて、今の時点で本当に必要なのかという議論が行われているのは、先ほどの熊田先生の御指摘にありましたように、国や地方が大変な財政的な問題が大きくなっていますので、公的に出せるお金というものが非常に限られている中で、本当にそれにふさわしい投資であるかどうかということがこれまで以上に厳しく問われている時代だろうとは思いますけれども、一方では、私自身も東京の国立の新美術館で働いておりまして、あれは特殊な美術館ではありますけれども、大変たくさんの方が美術に対して関心を持っていただく、それから六本木という地域を再開発するのに新美術館、それから森美術館、サントリー美術館等が一緒になって、あの地域の再開発にとても大きな役割を果たしたという評価をいただいて、新しい丸の内等でも同じような構想で美術館を表に出していくような再開発が試みられるような時代になっていると思うのですが、世界はもちろん、今や世界の美術館の黄金時代と言われるぐらい、ヨーロッパやアジアでも大変大規模な美術館の建設が進んでいるということで、美術によって人を引き寄せる力ということを期待されていると思うのですが、こういう中で、今の段階で鳥取県に本当にそれだけの投資をして美術館が必要なのかという議論に対して、皆さんがどう感想を持たれるかをお伺いできたらと思います。

私どもの多くは美術館関係者なのですが、衣笠さんが一番そういう意味ではマスメディアの会社を運営なさって、美術展なども応援をいろいろしていただいてはおりますけれども、

ある面では外から美術館界をごらんになって、今の現状、そういう意見に対しましてちょっと御感想を伺えればと思うのですが、いかがでしょうか。

○衣笠氏
　衣笠です。私も鳥取県出身でございます。テレビ局で４０年ほどやってまいりまして、今、その関連の会社でたまたま展覧会の運営とか、それからグッズの販売とか、県立博物館でもちょっとかかわらせていただいたことも、たまたまありました。そういうことで、私自身は美術にほとんど造詣のない人間でございまして、外から見た感じで言いますと、鳥取県が全国で一番最後の県立美術館になるのではないかという状況ですが、逆に言えば、スターバックスも最後ですし、セブンーイレブンも鳥取県が最後ということなので、逆にこういうことは、とても僕は貴重なことで、自分たちの県のことをどういうふうに位置づけて、それでどう発信していくかという、逆手にとって、非常にいいチャンスであろうと思います。最後であるということが、逆に言えば、いろんな前例を参考にできますから、そういうことを今回の、もしつくるのであれば、つくるかどうかと、我々はつくったほうがいいでしょうということで委員会に参加して議論をさせていただいているのですが、そういった例を参考にして、鳥取モデルと言われるぐらいのものを考えていける、非常にチャレンジできるチャンスなのではないかと思っています。やはり美術館を、高額な資金を投入してつくって、建物だけは立派だけれども中身は充実していないでは、必ず持続不可能になります。結局、何十年かたてば、もう耐え切れないということで終わってしまっては何も意味がないので、できる限りコストをかけないで、規模はそんなに大きさを欲張らないで、しかし美術館として魅力のあるもの、非常に難しい命題ですけれども、それに挑戦できるいいチャンスなのではないかと、そういうことに挑戦することが、やっぱり鳥取県というところを魅力的にするきっかけになるのではないかと私は捉えております。

○林田氏
　ありがとうございます。
　もうお一方、谷本さんは基本構想検討委員会にお入りいただいて、美術愛好家でいらっしゃって、美術館に対する期待も大きいと理解をしておりますけれども、そのようなお立場から今のことについてお考えをお伺いできますしょうか。

○谷本氏
　美術愛好家と言われれば、どうなのだろう、現代のほうに傾いているので、アートのほうかなと思ったりしますけれども、公的な立場からはちょっと物を申し上げにくいので、本当に私的に欲しいと私が実感しているという、本当に私ごとなのですが、この鳥取県の風景の中に美術館があったらなと夢想している状態です。６０万人を切っていますが、人口が少ない中でみんながもっと一つになれるツールとして、地域をみんながもっと愛せるツールとして美術館というものをつくったらいいのではないかなと、夢ですが、思っている状態です。こうして具体的にお言葉を持っておられる方々と一緒に検討させていただいて、形になっていく姿を見ている、本当に皆さんと同じ立場なのですが、わくわくどきどきしながら、美術館がぜひあったらなと、あってほしいと切望しております。具体的にはちょっと言えない、夢物語の状態でいるのですけれども、自分の実感として、欲しいと思っております。

○林田氏
　ありがとうございます。
　半田さんは日本博物館協会で働いていらっしゃって、博物館が当面している課題等をいろいろ御存じでいらっしゃって、それを解決するためにみんなで力を合わせようという活動もしていらっしゃるお立場だと思いますが、今の現状について、御感想をまず最初にお願いできますでしょうか。

○半田氏
　美術館というのは、よく博物館と区分けして考えられる方が多いのですが、美術館も博物館の仲間だという立場で、私は日本博物館協会で仕事をしていまして、博物館の仲間には総合博物館、歴史博物館、郷土資料館、水族館、動物園、植物園も入りまして、もちろん美術館も入っているという立場で見たときに、私は鳥取県立博物館の一つの発展的将来像として、美術館がひとり歩きしていくという方向を大歓迎したいと思っています。それからもう一つ、しんがりであることの意味というのは、今まで４５都道府県にある美術館のよくないところをきちっと判断して、いいとこどりができるというところが、非常に大きなメリットの一つだと思っています。
　その中で私は、鳥取県立博物館というと、どうしても県がつくった博物館というイメージが先行するように感じるのですが、ぜひ鳥取県民立博物館というイメージの美術館をつくり上げていける、衣笠さんもいみじくもおっしゃいましたけれども、鳥取モデルという一つの新しい県民が支える博物館という形を日本に示せる、あるいは世界にも示していけるモデルになってもらいたいと切に思っています。
　ちなみに今までの県立美術館の中でも、殿堂型の美術館というのが結構あって、殿堂というのは何か象徴的な、豪華で壮麗な建築物という意味があります。しかし、きょうお集まりのこの場はフォーラムです。フォーラムというのは、そもそもは人が集まる場所、公共の広場という意味を持っています。美術館をつくるというのは、箱をつくるのではなくて、広場をつくるのだという発想のもとに進んでいければ、とてもいい美術館ができるのではないかという大きな可能性を感じています。

○林田氏
　ありがとうございました。
　熊田先生には先ほどいろいろこれについての御議論いただきましたが、今の段階で考えられることがございましたらお願いできますでしょうか。

○熊田氏
　どういうことでもいいですか。

○林田氏
　はい、結構です。

○熊田氏
　先ほどは随分時間がオーバーしてしまいまして、最後のほうを少しはしょった形になったのですが、私、日本の都道府県立美術館、公立美術館は、主として近代美術館のスタイルだと申し上げました。そういう意味で、例えば大阪府も実はまだ美術館がないということで、鳥取だけではなくて、大阪も実はないのですね。ですから、そういう意味で最後の公立美術館という、どちらがそうなるか、県立美術館というのはどちらがどうかということは別として、やはり先ほどからも御指摘のあるように、最後であることを逆に転じて、次の２巡目の美術館が各都道府県にできるということはないのかもしれないけれども、最後を最初に転じるということで、本当に新しい発想の美術館をつくっていただきたいと思います。大阪市の美術館も、市立美術館があるけれども近代美術館という話は先ほど延々としたのですが、一時、大阪市立美術館と近代美術館を一緒につくってしまったらどうかという声が出たことがありまして、私は立場上それには反対しないといけなかったのですが、実は本当はそのほうがいいかなと思ったこともありました。近代美術館ということで、私は近代美術をずっと専攻してきたのですが、余りにその呪縛が強くて、どうも日本の地方公立美術館が固定化しているような、そこから抜け出せないような状況に陥っていることもなくはないように思うの

です。鳥取県立博物館は、美術部門、もちろん前田寛治とか、そういう近代部門が中心になるのですけれども、鳥取藩の近世の絵師たちのことも取り上げたりしていて、それも非常に評価されているということで、何もこれまでの日本の都道府県立美術館がやってきたことと同じ轍を踏む必要はなくて、さらにその先を見据えるような、新しいスタイルの鳥取県立美術館であってほしいなと期待しております。

それから、既に収集とか展覧会活動にも長年の蓄積があって、中身はもう十分にでき上がっているわけですから、あとはそれに最適な箱、先ほどもおっしゃったような、決して殿堂型ではなくてフォーラム型のほうがいいと思いますけれども、それにふさわしい箱ができれば、おのずと波及効果というのが出てくると思いますし、この点は期待をしたいと思っております。

○林田氏

ありがとうございます。

今お出しいただいた中で、私がちょっと気がつきましたのは、一つは、どんな美術館が考えられるのか。美術館といっても幅広いわけで、谷本さんは現代アートのアート的なものとおっしゃったわけですし、半田さんは殿堂型からフォーラム型へというお話があり、熊田さんは近代と現代もつなげた、ある意味では似ていらっしゃるかもしれませんが、今の我々の構想の中では、おっしゃっていただいた、県立美術館としては前田寛治や辻晋堂を中心にして、県にゆかりの作家の作品を集めようと、前に美術館構想がなくなったときにソフト面では頑張っていこうということで、学芸員を充実し、コレクションの費用も用意して、そういうことは続けていこうと、これまでそういう方向で頑張ってきたわけです。したがって、今度の県立美術館の基本の構想でも、それをベースにしながら周辺を、幅を広げていくという形の構想になっているわけです。ただ、今の熊田さんのお話にもありましたように、近代ばかりではなくて、特に最近よく若い人がたくさん訪ねるのは、谷本さんがお好きなような２１世紀美術館のような現代美術でとんがったというか、そういうものが期待されている面もあるのですが、今の県立博物館の構想について、谷本さん、そこのところはどう考えられるか、お考えを言っていただけますか。

○谷本氏

検討委員会の中で、各地の県立、市立レベルの美術館を見させていただいて、行かせていただいたのですが、私は全て行かせていただいて、今ここで思うことは、やはり市立レベルの美術館というのは地域に手が届きやすいですし、とてもソフト面で充実したものをされていて、そちらにやはり、ああ、すごいなと思うものを感じるのですが、そういう一方で県立の美術館というのは何といいますか、手がたいといいますか、かたいといいますか、気軽に訪れるというイメージではないのですね。その中で鳥取県というものを考えたときに、米子市さんは米子市の美術館を持っておられますし、ほかにも地域で持っておられるところはあるのですが、鳥取県立の美術館をつくるとなったときに、ううん、悩ましいなと思いました。市立レベルだととてもいいので、ああいうものを県立レベルでつくれたらいいのですけれども、そもそも考えたときに、市立の他県さん、２１世紀美術館もそうですけれども、県立の美術館があって、そこで醸成された文化、深みのある文化、濃い文化があった上で市立のすばらしい美術館、何というのですかね、市民にもっとポップに触れていただけるような美術館ができているということを踏まえますと、まず鳥取県に堅実な、そこまでかたくなくても、そこのぐあいは私たちで考えていかないといけないのですが、まずは守りの部分ですよね。しっかりと守った上で、各地の地域に攻めの部分で市立なり町立なりの美術館でおもしろいものをつくるという、段階を考えて整備していったほうが、県全体としての美術行政を考えたときに、いいのではないかなと思っています。

○林田氏

ありがとうございました。
内容的にどういう美術館であるべきかについても、それぞれお考えを伺えればと思いますが、衣笠さん、いかがでしょうか、今の点については。

○衣笠氏
ちょっと難しい話なので。私はさっき半田さんがおっしゃったことにすごく刺激を受けたのですが、博物館というのは美術館も水族館も一緒でとおっしゃったのですが、僕は理想的には美術展、例えばここに美術が飾ってあって、出たら、そちら側に水族館があると、とてもいい癒やしの場になるような気がします。すごく大変な名画を見て勉強して、それでほっと出たら魚が泳いでいるのが見られるという、例えばそういう広場というか、楽しみの場、人が集まれる場というものを美術館が果たせるのだったらすばらしいなと思いました。現実問題、水族館と一緒にすることはないとは思いますけれども、私がイメージするのは、そういう美術館です。基本的には、鳥取県のゆかりのある方々の名画を収集し、保存し、それを伝えていくことは、ベースとしてもう県立としては必要だろうと思います。それに何をプラスしていくかということは、もっと柔軟に自由に考えていいように思いますし、私は、やっぱり鳥取県というのは、本当にマンガでも人を集められるということを実際に体験している地域ですから、そういったことをもっと積極的に、それは常設でなくても企画展でどんどんやって、鳥取県立に行くと、ほかでは見られないポップカルチャーの企画展があるよということで全国の人が、そして、ひょっとするとマンガですと、もう世界からお客さんを呼べると思いますので、そういったプラスアルファの部分をどう広げていくかということを真剣に考えたものになればいいなと思っています。

○林田氏
ありがとうございます。
半田さん、熊田さんもそれぞれ今の点についての御意見を伺えますでしょうか。

○半田氏
県立レベルでも、国のレベルでも博物館は、さっきのお話とちょっと関連するのですが、歴史があり、美術があり、総合があり、理科系がありというふうに分かれてきたのは、いわば日本の豊かな時代における博物館行政によって分断されてしまった結果だと思っていて、何が分断されたのかというと、大きくくくったときの文化だと思います。日本が戦争が終わって７０数年の中でずっと守ってきた平和というのは、みんなが一生懸命働いて、衣食住がそこそこ満ち足りて、雇用があってという、生活の基盤ができ上がったという結果で今あるわけですが、しかし、人間というのは、そういう衣食住と雇用があるだけでは幸せになれないという生き物ですから、必ず心に栄養が必要なわけです。その栄養の補給源というものが結局博物館なわけですが、博物館がなぜ栄養の補給源になれるのかといったら、そこに文化としての過去の営みが蓄積されているからだと思います。人間は未来を見ることはできませんけれども、未来を想像することはできます。想像の糧というのは過去からしか学べないわけですから、過去の遺産をきちっと守って未来に伝えていかなくてはいけない。それが博物館の役目だと私は思っていますけれども、守っていくべき過去の遺産総体が文化であるわけで、美しい風景が美術作品になっていったときには、結果としての作品というのはモデルになった美しい自然と切っても切り離せないわけでありまして、きれいな絵がどういう絵の具で描かれているのかといったところには、科学もかかわっています。作家の研究には歴史もかかわっているという総合的な中で、検討会でも申し上げましたけれども、私は例えばニューヨークで日本の近代絵画のそれこそフォーラムが開かれるといったときに、前田寛治の作品がそこで取り上げられたときには、鳥取の県立美術館から必ずこの人が呼ばれるという人材を県全体で育てていってもらいたいと思っています。しかしその一方で、小学生たちが学校が終わったら美術館に行って、ホールの片隅にランドセルを投げ出して美術館の中を駆け

回れるような空間、あるいは現代アートが好きな人たちが、土曜日、日曜日にお茶を飲みながら、美術館の中でワークショップをやったりとかという、みんながどこかで美術館にかかわっていかれながら、敷居は低いけれども、きちっとしたコレクションを持ち、研究成果も世界に発信できるような学芸の人材が育っていける。余りお金をかけなくてもできるのではないかと思っています。

○熊田氏

美術館は基本的に博物館の一つの、一種であるというのは博物館学の世界では常識なのですが、自然系の博物館、それから歴史博物館、美術館。私は、基本に資料を保存し公開するという、基本的な機能は一緒だと思いますが、それぞれ少し違ったものがあると思います。特に歴史系博物館というのは、展示物によって歴史の知識を得るというか、知識を豊かにするという、基本的にそういうものだと思いますし、逆にその歴史博物館の場合、歴史観の問題があって、これは定説を採用するのか、異説はどうするのかとか、そういう学説についての難しい問題も出てきたりするわけですが、基本的に知識を高めるための場ということになります。対して、美術館は、もちろん知識を得ることもできるのですが、それよりも、知識で全て理解できるものでないところに美術作品というものの本質があると思います。ですから、ちょっと難しいのですが、知識を得るだけではなくて、先ほど副館長がおっしゃったようにフェルメールの作品で人生最高の時間を過ごしたという、そういう経験ができる場、芸術作品、アート作品と触れ合うことによって、知識ではない、さらにそれよりもすばらしい何かを得る場と、そういうものが美術館の、ほかの歴史系博物館とは違う特色だと思います。

ということで、一方で、水族館のほうが今は癒やしが得られるのではないかという、そういう人たちも多いと思うのですが、これはちょっと置いておきまして、逆に歴史系博物館より水族館のほうが近いのかなということも考えたりはしますけれども、とにかく、その辺の美術作品との出会いの場を演出する、そして、そこから生きるための何かを得られる、これをもう少し、私、今ここで掘り下げることができませんので、そういうところを掘り下げていただいて、それに最もふさわしい施設としてつくっていただければ、それこそ鳥取県民の方々だけではなくて、世界中から来てもすばらしいという、そういう場所がつくれるのではないかと思います。

○林田氏

ありがとうございます。

先ほどのお話の中で、どのような美術館をつくるのかということと同時に、もう一つはどのような運営をするのかという、県民の皆さんと連携するという考え方を私どものレポートのほうでは大事にしておりまして、これは半田さんがやってこられた日本博物館協会でも、日本の博物館が非常に数はふえたけれども、大変経営が厳しくなって冬の時代と言われているのをどう乗り越えるかということを考えると、それは対話と連携の博物館だとか、市民とともにつくる博物館という考え方で、博物館が孤立していてはいけない、もっと住民の皆さんというか市民の皆さんと連携して協力し、対話し、かつまたその期待に応えられるような活動をしていかなければならないという方針になったと思うのですけれども。

このレポートでもその点はかなり強調したつもりですが、これから新しい美術館をする場合にその点で気をつけなければならないというか、力点を置くべきところはどんなところとお考えなのか、半田さんのほうからお話しいただけませんでしょうか。

○半田氏

基本的には日本の博物館は、明治以降発展を遂げて百数十年ですけれども、ほとんどの博物館は私立から発生していて、国は帝室博物館から始まり、教育博物館、今の国立科学博物館と東京国立博物館が根っこにあるわけですが、私立の博物館がすごく頑張ってきていた時代を過ぎて、高度成長期に公立博物館がたくさんできたという時代を経ていますが、すごく

大きな変わり目に来ていると思います。
施設の老朽化、これは鳥取も同様ですけれども、非常に財政が厳しい中で突きつけられている課題というのは非常に大きいものがあります。その中でどういうふうに変わっていかなければいけないかというのは、これから考えていく鳥取の美術館にも共通しているところだと思うのですが、もちろん箱も大事です。大事なコレクションを保管して未来につなげていくためには雨風をしのぐための屋根は必ず必要なわけですから、箱は要るわけです。しかし、美術館というのは箱ではない、機能だというところにやはり県民の皆さんがきちっと意識を置いて、自分たちの宝物を保管している場所だけれども、利用の仕方は箱ではない。学芸員の人たちももっと外に出ていく。
世界にＩＣＯＭという国際博物館会議というのがあって、７月の初めにミラノでありますけれども、例えばヨーロッパの人たちの考え方というのは、博物館とか美術館というのは国とか県がつくって自分たちに与えるべきものではないと。自分たちが自分たちの宝物を守って、自分たちの子孫につなげて残していくものだと。主人公は我々だという意識がすごく強いのです。困ったときには助ける。積極的に美術館が自分たちに何をしてくれるのか、美術館が自分たちにとってどうして必要なのかというのは自分たちが考えることで、県が考えることではないでしょうという意識が住民の側にすごく強くあるという中で博物館が発展してきた。ヨーロッパももちろん経済的に非常に厳しい時期があって、今も非常に厳しいです。しかし、イタリアなんかも本当にそうなのですが、すごく元気なのです、美術館とか博物館が。それはなぜ元気かといったら、住民が自分たちの宝物を守り、自分たちの子孫に残していく非常に大事な役割を持っているところだから、きちっと守っていく責任は自分たちにあるという意識を持っているから県も国も動いていくという構図が非常に大事で。だから、私はこれからの美術館を鳥取で考えるときには、やはり美術館の側も外に出る必要があって、壁の中で仕事をするのではなくて、壁の外に出ていって美術館という機能を果たしていく。住民の人も敷居が高いと思わずに、ずかずかと入っていって、しかし、それは好き勝手なことをその場でやるということではなくて、やっぱり自分たちが未来の子供たちに残していくものを自分たちが参加することによってどうやって残していくのかということを一緒に考えていけるような場をつくっていくというのが平成１３年からやってきた対話と連携、市民とともにつくる博物館というものであって、博物館のほうも意識を変えていかなくてはいけないところがある一方で、やっぱりそれを支える住民の人たちも博物館に対する意識というのは新しい感覚で変えていくというのが望ましいのではないかと思います。

○林田氏
ありがとうございます。
日本は、国公立の場合はどうしても税金で維持されるということがベースになりがちですので、かなり日本博物館協会が、しかし、このままではやっていけないので、何とかして新しい展望を開かなければならないということでそういう方針を出していただいたと思いますが、なかなか正直言って私の理解では十分どちらにも浸透していない面があるので、よほど頑張っていかなければならないと思いますが、そういう意味では、今回のこういうフォーラムが開かれるということはまさにそういうことに近づいていくための一歩ではないかと思いますので、期待しているのですけれども。
今のことについて具体的に何か博物館、特に美術館の運営、鳥取県立博物館でもいいですし、美術館一般について、今の連携してつくっていく、協力してつくっていくということについて何かお考えがありましたらお願いしたいですが、熊田さん、いかがですか。

○熊田氏
市民連携とかその辺。

○林田氏

そうです。

○熊田氏
これは言葉で言うのは易しいのですがね。大阪のときも市民連携ということを、私がもうやめるころになると非常に重要な要素として、これを盛り込まないとだめだということで、いろいろ言葉で言うのは簡単ですが、実際にどういう形でそれをつくっていくのかというのはとても難しい。
美術館を一つの場所として、行政用語でプラットホームということが随分言われたことがありまして、プラットホームにならないといけないと言いますけれども、要するに美術館、物理的な場というよりも、さらにもうちょっと違った、人と人が集まってきて何かが起こる場ということ、そういうことを目指しながら、美術館というのは決して箱物だけ、箱が美術館ではなくて、その箱の中で展開されることがまさに美術館の本質だということ。そして、それは美術館がまだできてなくてもそれは美術館だという、そういう観点に立てば、今の建物をつくる前の段階から、あるべき美術館を目指して市民の中で美術を愛好する人たちの層、それから美術をつくる人たちの層、さらにもう少し広げて、芸術文化全般にかかわる人たち、こういう人たちがそれぞれのアイデアをぶつけ合いながら何か新しい創造的な力を醸成していくような、そういう仕掛けをつくってそれを形にあらわしていくという。これはとても抽象的な言い方で、具体的に何をすればいいのかというのはとても難しいのですが、イメージとしてはそんなことになってくるかなと思います。

○林田氏
ありがとうございます。
私もこの関係でいろいろなところを視察させていただいて、大阪市の自然史博物館へ伺いましたけれども、あちらでやっていらっしゃる、自然愛好家の皆さんとの連携みたいなことは本当にすばらしいことをいろいろやっていらっしゃるなという感じがしまして、美術とはまた違うわけですが、一つの目標になり得るかなと思って感じましたし、大阪府、市の場合は橋下さんという大変話題になられた知事さん、市長さんがいらっしゃって、特に博物館の統合だとか文楽への補助金の問題とかいろいろあった中で、皆さんがいろいろ頑張られて、それぞれそう大きな変化なしに頑張っていらっしゃったのかなと思いますので。でも、それはやはり心がけとしてそういう連携の気持ちを大いに持っていらっしゃることが、ああいう機会がきっかけになってかなり出てきたところがあったのではないかと思いましたけれども。

○熊田氏
そういうことで、理念的にはそれで非常にいいのですが、美術館を担うべき学芸員、それからキュレーターといいますか、この人たちは一応専門家として学芸員の中でも収集保存部門の学芸員とそれから展覧会を企画する学芸員とさらに美術館教育、ミュージアム・エデュケーション、こういうことにたけた学芸員、いろんなタイプがいて、いろんな部門の学芸員が協力し合って一般的には美術館は運営されている。さらにそこにＮＰＯとか外部の人たちと意見を闘わせながら運営をしていくという、一般的にどこでも大体こんな形でやっていると思いますが、ただ、外部の意見ばかりを、県民の意見、市民の意見を尊重する余り、県民、市民の人気投票による美術展とか、そんなことを発想するところもなくはないように思うのですが、これは違うと思います。やはり学芸員という立場で本当にいい姿を求めてやっている人たちと、それを真剣に、高評価、悪評価は別として、評価をして、それに意見を言う立場の市民、この真摯な討議によってしかいいものは生まれてこないと思います。要するに、多数決あるいは人気投票のような形で運営していく、あるいは建設していくというのは非常に禍根を残すことになると思いますので、逆にこれは注意しておかないといけないことだと、私はそのように思っております。

○司会
　今の点について、衣笠さん、谷本さん、いかがでしょうか。

○衣笠氏
　運営についてはなかなか私、意見は特にはないのですが、やはり橋下さんがおっしゃったようなことはいずれ日本全国で起きてくることだと思います。今の時代の流れでいけば、少子高齢化、そして経済が縮小していく、縮小していくから不幸というわけではなくて、縮小していくことは間違いない。そういう中でいうと、行政に携わる方は必ずああいうふうに発想していくのはもう間違いないこと、組織はそういう考え方をすると思います。
　だとすれば、そういう中で、どういう行き方があるのか。県立美術館は別に県のものではなくて、先ほど半田さんもおっしゃいましたが、県民のためのものなので、県の方々が考えていることで運営するものではなくて、県民が集まってというか、喜んで見に来てくれるものでない限りは続かなくなると私は思っていますので、そこのところをやはり、人気投票で何かをやるということは私もする必要はないとは思いますけれども、そうではなくて、県民が足を運んでくれることはどういうことなのかということについて一生懸命悩むのが美術館の担当者の仕事なのではないかと思います。

○司会
　谷本さん、いかがですか。

○谷本氏
　運営であれば、東京都美ですか、都の美術館がボランティアさんたちを募って美術館運営に積極的にかかわっていただいている例があるとお聞きしていますので、本当にそういう形は理想だと考えております。先ほど熊田さんの講演の中でもお話がございましたが、大阪市の美術館を建てるときに、まだ建ててはないのですが、市民のほうから、なぜ美術館がないのかと、建てないといけないではないかという請願ですか、お願いが上がってきたというのが私は心を打たれるものがありまして、鳥取県のことを振り返ると、建てなくていいのではないかとか、要らないのではないかという請願が上がってきている、多分立地のこともあるのですが、うちに欲しいとかいうのはあるのですが。何かちょっと違うな、都道府県の一番最後に建てる美術館、建っていない美術館、大阪と鳥取と２つの地域を比べても全然違うなというのがすごく悲しくて。なので、システムとして市民、県民の方がこっちにかかわってくれるような何かをつくったほうがいいと思うのです。ただ、思いとして、県民の皆さんにも美術、文化というものに対する思いを持っていただいて、もうそこからの話だと思うのです。皆さんから上がってくる意見が、要らないのではないかという意見が多い中で、本当に要らないのですか、もう一度考えませんかということの問いかけから始めないといけないのかな、そこからのスタートかなと思っています。

○林田氏
　ありがとうございます。
　連携という点では、私どもの検討会議の報告でも外部評価という考え方を入れております。私自身は国の独立行政法人で働いた経験からいたしますと、非常に問題がある制度でもあるのですが、しかし一方では、やはり国民目線で、来訪者目線で運営していかなければならないということに関しては相当な意識転換があったように思いましたので、私どもの報告の中でも実はそういう考え方で、誰を選ぶかはいろいろ難しいところがあるのですが、きっちりした外部評価制度というのは連携を図る意味で大事ではないかということを実は入れているのですけれども。
　大分時間がたってきましたので、まだまだいろいろお話を伺いたいところですけれども、せっかくですから、きょう御出席いただいている方々からも御意見をいただいて対話ができ

たらと思いますので、このあたりでちょっとお伺いしてみたいと思いますが、いかがでしょうか。どなたか、今までの関連でも結構ですし、今まで出たこと以外のことでこの際何か言っておきたいことがございましたらお願いできますでしょうか。
　では、４列目の女性の方。

○会場発言
　きょうは貴重なお話をありがとうございます。新聞や報道でも見ていて、県立美術館についての関心が、どこに立地するかということがまず関心になっているような気がするのですけれども、鳥取県は、すごく東西に長いので、東部なのか中部なのか、どこかに建ててしまうとやはりすごくその地域の周辺のほうに美術館の恩恵というのが偏ってしまうのかなというのがすごく気になっていまして、例えば分館ですとか別館のような形で県内、せめて２カ所といいますか、何カ所かにばらけると最近のアートツーリズムみたいなものにもつながるのかなというふうにちょっと期待しているところですが、結局のところ、立地を決める観点というのですか、例えば交通の便がいいとか、そこの周辺の景観がいいとか、地価が安いとか、多分いろんな観点で選ばれると思いますけれども、どういう形で決められるのかというあたりをちょっと教えていただけたらと思います。

○林田氏
　これは私がお答えしたほうがいいのだろうか。私の承知している限りで言いますと、確かにその議論は委員会の中でもありましたし、ほかからも聞こえてきて、特に分館的な形のものをつくってはどうかという御議論はあったように思いますけれども、もちろんそれも一つの考え方だろうと思います。ただ、そのためには実際どのくらいの経費がかかるかとなると、かなり大きな金額に、増加する要因になるだろうということが一つ考えられるものですから、どういう形でやるかということともあわせて、今後御検討の余地はあるのかもしれませんけれども。我々としてはやはり拠点を整備することが重要ではないかという考え方で今はまとめておりますけれども、ただ、いろんな形で各地にいろんな施設もあるわけですので、そういう場所と連携しながら、または出前的なことをいろいろやっていく、展覧会、それから普及教育活動のような形のことをいろいろやっていくことは構想の中では考えるべきではないか、中核たる施設がそういうことについても十分配慮した運営をすべきではないかという方向で今のところは整理はしておりますけれども、とりあえず、そんな考え方で今まとめつつあるということですが。

○会場発言
　せっかくの整備なので県内はもちろん県外、国外、世界からも注目されるような美術館を望んでいます。よろしくお願いします。

○林田氏
　ありがとうございます。ほかに。
　どうぞ。

○会場発言
　きょうはいろいろお話をありがとうございました。実は５月の下旬の日本海新聞に美術館は中部にということを投書しました大山町のアライと申します。そのときはそう思いましたが、今いろんなお話を伺って、そしていろんな予算の関係、さまざまなことの思惑もあって、ああ、これはそれこそもう担当の方々がいいぐあいにしてくださるだろうと、私も実はそういう思いできょうお話を聞かせていただきました。
　私の過去の美術館めぐりからの体験を３つほど言わせていただいて、それを今後の美術館をつくり上げるときに組み入れていただくというか、そのようなことをしていただけたらと

思います。実は２０年ほど前にスペインのプラド美術館に行ったときのことです。美術館の中に入りましていろんな館を回っていたときに、一つの部屋で青年がキャンバスを立てて絵を描いていて驚いてしまったのです。ガイドさんにこんなことスペインで許されるのと聞いたときに、ああ、ここは申し込めば、きちんとした手続をとれば当たり前なのですよと言われました。その２０年ほど前は、日本はまだ美術館に入るときペンなどはしまってくださいという、そういう時代だったように思っております。

２つ目は、実は瀬戸内海の直島のコンテンポラリーに行ったときです。あそこはベネッセハウスという宿泊者が２組か３組ほど泊まれる施設も併設されておりました。そこに夫婦で泊まって、夜の９時前ぐらい、暗い中、誰ももうお客様はいらっしゃいません。私たち夫婦の靴音だけで館内をめぐって歩いたときの、あのときの体験は今もって忘れられません。そのような思いもあります。それから、やはり瀬戸内海ですが、瀬戸内芸術祭というのが島と島をつなぐという、島という点から線でつないで島からめぐっていくという、すごく大きなスケールの芸術祭をやっております。そのときも幾つか島を歩かせていただきました。ああ、美術館という一つの小さな枠にこだわらずに点と点を結ぶという、こういうあり方もいいなと。そうすると、鳥取県、東部だ中部だと美術館のことを引っ張り合っていがみ合うのではなくて、東・中・西を点と線で結ぶという大きなスケールの何かを考えていただけたらと、そんなことも思いました。

もう一つは、実は私が以前読んだ本で、人生に行き詰まって美術館に行ってある名画の前に半日座っていて、そしてそこから自分の生きる道を見出して、何とか生きていこうという勇気が湧いたという小説を読みました。美術というものは心の栄養剤なのだとそのときに私も思いました。いろんなことを思います。ですから、先生方にどうぞ一つの美術館ということにこだわらずに、大きな何か、さっきの瀬戸内のような点と線を結ぶようないろんなものを考えて美術館をつくっていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○林田氏

ありがとうございます。今のことについては御議論としても御意見としても出たりはしておりますので、いろいろ委員会の中でも話題になっていくことと思いますけれども、今の考え方は、先ほど申しましたように、少なくとも何らかの拠点が必要ではないだろうかということについては、とりあえずそこをまず中心の課題として取り組んでいこうではないかと。ただし、それに加えて、さっきも申しましたように、県内のいろんな特色のある施設等と連携しながら、この活動をいろんな形で広げていくような機能もぜひ持ってほしいという方向で、今はとりあえずそこまで頑張っていきたいと思っているところでございます。できるだけそれがまた評価されていくと、広がっていくことも期待はしてはおるわけですけれども。

ほか、どうぞ。

○会場発言

県立美術館と辻晋堂と前田寛治のコレクションの関係ということで意見なのですが、一般論で言えば、県立美術館が鳥取の県庁所在地にあるというのが当たり前のことではないかと思うのですが、鳥取県の特殊な事情というのは中部の前田寛治と西部の辻晋堂という、どうしても顕彰しなければならないアーティストがいて、それを現状では鳥取にコレクションが集中してしまっているのですね。それで、今回も誘致の話の中で、西部からは大山山麓というのがたしか上がっていたと思うのですが、もっと辻さんのことが浸透していれば、二部とか、二部はやっぱり奥だけん、フラワーパークはどうだという話が出てきてもいいと思うのですが、そんなのがなくて、いきなり大山というのが来てしまっているというのはやっぱり浸透してないからだと思います。それで、鳥取にできたとして、そこに子供を招いて勉強しに来てくださいというのではなくて、まず、やっぱり先生がとりあえず教えてもらってないと思うので、ビデオとか出前という形でもうちょっと浸透させていくことをしていただきたいと思います。

それで、将来ひょっとしたら西部に辻晋堂の記念の、辻晋堂でも八木一夫でもいいのですけれども、セカイトウチョウですね、クレイアートの美術館とか、あと、中部であれば前田寛治の記念館ですね。山口にある香月泰男の記念館みたいな形のもので、小さくていいのですが、そういったものは住民の中の機運が醸成されてでき上がっていくという、そういう機運が盛り上がるような取り組みというのを、多分すごくバランスのとれた美術館になると思うのですけれども、県立美術館のほうで進めていただいて、将来にそういう可能性を残していただくような取り組みをしていただけたらいいなと思います。

○林田氏
ありがとうございます。
この点は確かに、先ほど申しましたように、辻晋堂、それから前田寛治のコレクションをかなり集めていただいて、実はことしの初め、数カ月前に県の博物館で前田寛治の作品でコレクションを持っていらっしゃる、県博が持っていらっしゃるものをほとんど展示するような展覧会が開かれていたのですが、私も見せていただいたのですが、すばらしいものなのですが、正直言って、お客様が非常に少ない状態であったなというのを残念に思ったのですが、確かに、おっしゃったように前田寛治がいかなる点においてすばらしいか、辻晋堂がどんなに評価されているかというあたりはもう少し皆さんに知っていただけるような活動を博物館にもやっていただく必要があるなということはそのとき私は感じて、そんなお願いもしたのですが、その点はまさに私もそうだと思いますが、私ばっかり答えてもあれですね。
熊田さん、いかがですか。今の点について。

○熊田氏
ちょっと私……。

○林田氏
いいですか。さっきおっしゃっていただきましたから。
よろしゅうございますでしょうか。
ほかにはいかがでしょうか。
どうぞ。

○会場発言
本日は本当に先生方、ありがとうございました。いろいろ勉強させていただいたのですが、ディスカッションの中の最初に美術館は必要かと林田先生が言われましたよね。平成１３年に文化芸術振興基本法が施行されて、文化芸術の重要性が多分認識されたはずなのです。その中で、美術館のこともそういう土台をつくれということになっていましたが、結局その当時、鳥取は美術館がつくられなかったということで、結局子供たちが一番被害者なのです。といいますのは、本当に子供たちが美術館などで本物を見て感性を磨かないといけない時期にそういう機会がなかった。これは私たち県民、親の責任でもあるのですが、美術館がないというのは、そこに連れていかないということ。でも、そういう美術館をまずつくらないと、変な話ですが、野球の選手が野球場、サッカー選手がサッカー場がないように、本当にそういうグラウンドが、まずバックボーンがないと本当に活動はできないのです。
それと、先ほどからパネラーの先生方が最後の美術館、鳥取、県立美術館と何度も言われましたが、これは私たち県民が本当に反省すべき点なのです。結局は全国に向けて、変な話ですが、文化後進県を宣伝しているようなものなのです。だから、私たち県民はもっと美術館の建設に向けて、初めから一生懸命取り組まないといけなかったことをかなり反省しております。今からでも遅くありませんので、最後発で、先ほどから鳥取モデルとか言われましたが、いろんな問題があると思いますけれども、県民が一緒になって本当に美術館をつくる方向に行かないと、本当に鳥取県はもう恥をさらすような県になりますので、その辺はまた

先生方によろしくお願いしたいと思います。以上です。

○林田氏
　先ほど来、最後という話が大分出ているのですが、私が承知しているのでは、都道府県立という面では、大阪府立の美術館はないですが、大阪府には国立もありますし、市立もあるということで、ちょっと状況が違うのかなという感じがいたしますのと、山形は山形美術館というのでしょうか、私立であるけれども、山形県立美術館はないということのようで、しかし、県を代表するような美術館と理解されているものがあるということで、正確に言うとそういう状況ではあるのですが。それでも先ほど来この点については、パネラーの皆さんも最後であることをうまく活用しながら頑張っていったらどうかということで御指摘をいただきました。今のは御指摘と伺ってよろしいでしょうか。
　ほかにはございませんか。よろしいでしょうか。
　当初の予定から３０分ぐらいオーバーいたしましたので、このあたりで締めにしたいと思いますが、特にまとめは必要ないと思いますけれども、皆さんからどんな美術館をつくるべきか、またどんな運営をすべきか、特に最後にできる県立として、よく比較対照をしながら、いいものをつくってほしいというお話をいただいたと思いますので、このあたりできょうのフォーラムを終わりにしたいと思います。
　皆さん、本当に御参加くださいまして、ありがとうございました。パネラーの皆さん、本当にありがとうございます。（拍手）

○司会
　壇上の皆様、そして会場の皆様、どうもありがとうございました。壇上のパネリストの方々にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）
　以上をもちまして、鳥取県美術館フォーラム２０１６「みんなでかんがえる美術館の可能性」を終了いたします。なお、ロビーにてこの後、「意見・質問受付コーナー」と題しまして皆様と県立博物館の学芸員との意見交換の場を設ける予定にしておりますので、御希望される方は奮って御参加ください。
　それでは、皆様、お帰りの際にはお忘れ物のないよう御注意ください。本日は御来場いただきまして、どうもありがとうございました。